タイ代理出産騒動を生んだ光通信「重田クローン帝国」の原点

タイで発見された代理出産乳児たちの父親が重田康光会長の長男であることから、ITバブル以来の注目を集める光通信。創業者・康光氏の過去にグロテスクな騒動の原点があった。

ジャーナリスト　高橋篤史

15年前のITバブル以来、久々に光通信が世間の耳目を集めている。遠くタイで8月6日に発覚した大量の代理出産ベビー置き去り騒動が発端である。10数人もの乳児を代理出産させた24歳の日本人男性の名前は重田光時氏。光通信の重田康光会長（49）の長男だ。現地報道を基にこの情報がネット上で拡散し始めると、光通信の株価は10％以上値下がりした。

当初、人身売買の疑いまで浮上した今回の騒動だが、短期間に大量の代理出産をさせた動機は謎に満ちている。現地警察の捜索を逃れるように光時氏がカンボジアへと出国したことも謎が謎を呼んだ。光通信は「事実確認の有無も含めコメントできない」と口を閉ざしたままだ。どうやら謎を紐解くカギは、光通信がひそかに進めるアジア金融事業にある。

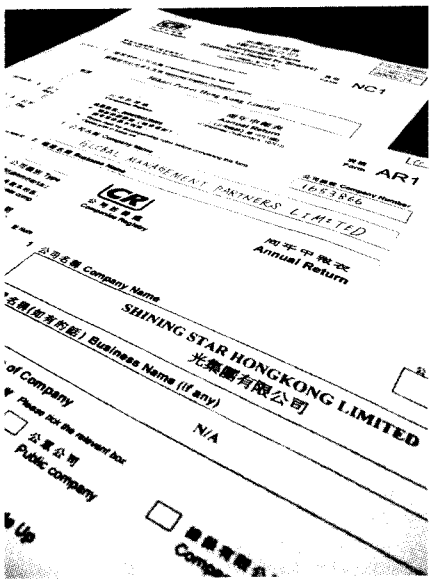
主戦場はカンボジア

重田会長が提出している大量保有報告書によれば、共同保有者である光時氏の職業は学生。が、同氏は20歳になるや香港に移り住み、以降、次々と会社を設立している。まるで日本大学を中退し起業家となった父親を真似るような武者修行ぶりだ。確認できただけで、香港とカンボジアにおける関係先は7社。手始めは香港で2011年6月に設立した「シャイニング・スター・ホンコン」。さらに同地では同年8月に「グローバル・マネジメント・パートナーズ」、13年11月に「ヒカリ・パワー・ホンコン」なる会社を設立している。

このうち米国在住の日本人と折半出資するグローバル社は、日本語のホームページを開設しており、業務の一端を窺い知ることができる。それによれば、同社が手掛けるのはHSBCでの口座開設やタックスヘイブン（租税回避地）のドミニカなどでの会社登記、香港での永住権取得といった各種支援サービス。言ってみれば、富裕層や小金持ち向けの資産逃避ビジネスである。同社ホームページが強調するのは「業界最安値」だ。

が、おそらくこれは光時氏が最も注力するビジネスではない。グローバル社は12年5月にカンボジア事務所の開設を公表して以降、更新されていない。証言や各種情報を踏まえると、そのカンボジアこそが光時氏の主戦場と思われる。同国商業省のサイトによれば、光時氏は「ジュゲム・カンボ・キャピタル」なる会社の代表で、同社は12年2月に大幅な増資を行っている。さらに同年6月には前述したシャイニング社が「ラクスミ・プライム・インベストメント」の新株を取得。ラクスミ社には「センチュリー22」という子会社がある。さらに時期不明だが「ナイン・バンブー・リーフ」なる会社も設立している。

最重要先と目されるのはラクスミ社だ。同社が行おうとしているのはマイクロファイナンス（貧困層向け小口金融）である。カンボジアでは都市部を中心にマイクロファイナンスが急成長している。ラクスミ社の経営トップを任されているのはオーストラリアで会計士の資格を取得したカンボジア人。ハイチ投資などを手掛けるケ



光時氏が関係する会社の現地登記簿

イマン諸島籍のファンド会社にも関わっているやり手のようだ。

実はカンボジアでは光通信も子会社の「ビジネスパートナー」を通じマイクロファイナンスに乗り出している。12年6月に現地企業「アクティブ・ピープルズ・マイクロファイナンス・インスティテューション」を子会社化しているのだ。ビジネス社はもともと光通信の経理部門が分社したものだが、00年代半ばから金融事業に傾斜。光通信がOA機器を販売する際、大手とリース契約を組めない与信力の低い先に資金を付ける役割を担ってきた。さらに10年4月にはアイフルの元常務を社長に迎え入れ、商工ローン事業を強化。「業界では勢いのある会社で知られる」(大手貸金業者)という。資産規模はここ2年で4倍近い200億円超に膨張している。

「重田(康光)さんはベンチャー経営者の集まりで知り合って以来、一方的に大島(健伸)さんを尊敬していた時期がある」――。5年前に破産したSFCGの元役員はそう話す。携帯電話やOA機器を右から左に販売する光通信には自社プロダクトがない。そんな中、強力な営業部隊による「プッシュ・マーケット・ポリシー」で共通し、商工ローンという独自プロダクトで成功を収めたSFCGの創業者・大島氏に心底惚れ込んだらしい。光通信は破綻するまでSFCGの大株主だった。

個人的に親交のある関係者によると、重田会長はカンボジアに長年、寄付を続けているという。名目は学校建設のためのようだが、最初からビジネス進出を考えての寄付という可能性もある。前述したカンボジア商業省のサイトによると、光時氏は同国の国籍を持つとされ、現地当局にかなりのコネクションを有する模様だ。「重田さんは光通信と息子の事業を互いに競争させることで、カンボジアでの事業拡大を考えているようだ」。前出の関係者はそう話す。

光時氏の事業が父親の承認の下、行われている公算は大きい。香港やカンボジアの一部関係先には、光通信の執行役員や重田会長の大量保有報告書の事務連絡先と同じ読み仮名の人物が役員に入っている。カンボジアでのキーストーンとみられるラクスミ社に重田家の資産管理会社「光パワー」が出資している事実もある。光時氏はタイで騒動が起きた直後の8月13日、同社の取締役を辞任した。

「アジア制覇」の野望

では、冒頭のタイ代理出産騒動はどう理解したらいいのか。「重田さんの遺伝子を引き継いだ子供たちをアジア制覇の幹部に育てる考えではないか」――。先の関係者はそう推測してみせる。重田会長は家族と資産管理会社群で現在も約6割の光通信株を持つ。05年頃から3人の息子たちに計画的な株式譲渡を始めるなど、一族支配に強いこだわりがあるようだ。

1999年夏、光通信はブローカーに対し休眠会社を1社300万~800万円で50~60社も仕入れるよう依頼したことがある。光通信を次々分社化して上場させる構想があったらしい。休眠会社が必要なのは当時の上場要件として設立2年を経過している必要があったからだ。それらに事業を注入して促成の上場予備軍に仕立てるわけである。実際、ブローカーから6社を買い取り、うち1社はその後、有力子会社「アイ・イーグループ」へと変身させた。

関係者が語る〝重田クローン帝国〟によるアジア金融制覇の野望もそれと似ていなくはない。もし本当なら重田会長の拡大欲は15年を経て妄執の域に達したようだ。